

熊本城 復興に向けて

〈6〉西南戦争と熊本城

神風連の襲撃から約4か月後の明治10(1877)年2月、今度は西郷隆盛を中心とする薩摩の私学校約1万3,000人が熊本に迫ります。東京を目指す彼らの進軍を阻止するため、熊本鎮台(陸軍)司令長官谷干城は熊本城に籠城して戦う決心をします。この決断により、熊本城は日本の城の中でも数少ない、近代戦を経験した城となりました。

薩軍が城下まで迫りつつあった2月19日、天守や御殿が焼失します。この火事の原因は、天守が薩軍の大砲的になることを避けるために鎮台が火をつけたという自焼説や、薩軍の内通者が放火したという説、鎮台の不注意によって失火したという説があり、その原因は今でも謎に包まれています。大天守跡からは、この時焼けて赤く変色した瓦などが出土するほか、石垣石材の中には高熱を受けて剥離したものも見られます。本丸御殿からは炎上した状態のまま炭化した木材が出土しており、火災の激しさを物語っています。

21日には戦闘開始となり、鎮台と薩軍との間で激しい砲撃戦が始まります。また、電信が途絶えて城内から外部へ連絡することができなくなりました。薩軍は熊本城を取り囲み、花岡山・山崎・安巳橋・長六橋などに砲台を築いて熊本城を砲撃しました。対する鎮台は約4,000人が籠城して飯田丸・本丸・藤崎台・千葉城・馬具櫓などの砲台から応戦しました。飯田丸には砲台のほか、小銃を修理するための場所もありました。竹の丸には炊事場と火薬庫を置き、火薬庫は櫓方(現加藤神社)にも置いています。そのほか、工兵が戦況に応じて城内各所に防塁や戦闘用の通路を造っています。戦闘には大砲や小銃を使いましたが、鎮台はガラス瓶に火薬や釘・ガラス片を入れた手榴弾のような武器の製造もしています。また、地雷も使っており、京町や法華坂などに設置しています。

3月に入って高瀬・山鹿・植木方面などでの戦闘が激化すると、薩



▲鎮台の砲台が置かれた馬具櫓の周辺
(熊本城顕彰会蔵、熊本博物館寄託)



火災で赤く変色した瓦
(熊本城調査研究センター)▶

軍はそこへ援軍を送らざるをえなくなりました。薩軍による熊本城の包囲が手薄となり、そこに鎮台兵が攻撃を加え、城の西に位置する段山で籠城中最も激しい戦闘が繰り広げられました。鎮台はこの戦闘で薩軍から段山を奪還しましたが、両軍ともに多くの死傷者を出しました。薩軍は城を取り囲む戦闘員の不足を補うため、坪井川下流をせき止めて湖水をつくり、城周辺を水没させました。城内の食料が尽きていく中、薩軍の包囲を突破する部隊が4月8日に突撃して、味方の官軍と連絡することに成功しました。城内の情報を得たことで援軍が熊本城へ向かい14日に入城して、城を取り囲んでいた薩軍は敗走し籠城が解かれました。

西南戦争は、熊本城が唯一経験した戦争でした。鎮台の奮闘もあり、50日以上にわたって続いた籠城戦中、城を薩軍に奪われることはありませんでした。これによって、鎮台の優秀さとともに、熊本城が築城後270年ほど経ってもなお、守りの堅い城であることが証明されました。